

美術家パウル・ハウシュタインの生涯，作品，教育

針 貝 綾

An Artist Paul Haustein, his Life, Works and Education

Aya HARIKAI

1. はじめに

筆者はこれまで、近代ドイツにおける美術工芸運動に関心を持ち、その中の核となる組織、ヘッセン大公エルンスト・ルートヴィヒが拓いたダルムシュタット芸術家コロニーやミュンヘンの美術工芸会社である手工芸連合同房、シュトゥットガルトのヴェルテンベルク王立美術工芸学校教育実験工房、ニュルンベルクのバイエルン産業博物館美術工芸マイスターコースについて調査、研究を行ってきた¹。

そのいずれの組織にも関わった人物として筆者が注目しているのが美術工芸家パウル・ハウシュタイン (Paul Haustein, 1880-1944) である。ハウシュタインについては、1996年にシュトゥットガルトのヴェルテンベルク州博物館において回顧展が計画されていたが、「急を要する博物館の改修」により展覧会が延期され、ついに陽の目を見ることはなかった²。加えて、ハウシュタイン研究も刊行されていないため、ハウシュタインについてはその重要性にも関わらず、ほとんど知られていないという状況にある。その長いキャリアに関して、分かっていることは少ないが、本稿ではハウシュタインの経歴に沿って、彼の作品や金属工芸教育について整理しておきたい。

2. ケムニッツ，ドレスデン～ミュンヘン時代：1880～1903年

ハウシュタインはドレスデン西部のケムニッツで1880年に生まれた。1896年ドレスデンの美術工芸学校に進学したが、翌年夏にミュンヘンに移り³、ミュンヘンの美術工芸学校に転校した⁴。翌1898年初めにはミュンヘンの王立造形美術アカデミーの入学試験に合格し、画家カール・フォン・ピロティエ (Carl von Piloty, 1826-86) の弟子ヨハン・カスパー

1. 拙著『ユーゲントシュティルからドイツ工作連盟へ—世紀転換期ドイツの美術工芸工房と教育』九州大学出版会 (2017年) を参照されたい。
2. Heike Schröder, "Von Personen. Paul Haustein - künstlerischer Gestalter der "Vasa Sacra" in der Brenzkirche", *Brenz-Gemeinde-Brief*, Nr. 3, Stuttgart, 1996, S. 4-7. の冒頭にはハウシュタインの展覧会は延期されたとあるが、ヴェルテンベルク州博物館の学芸員カタリーナ・キュスター＝ハイゼによれば、ハウシュタインの回顧展は実現されることはなかった。ハウシュタインの展覧会は当時学芸員を務めていたハイケ・シュレーダーが企画を行っていた。
3. Kathryn Bloom Hiesinger (Hrsg.), *Die Meister des Münchner Jugendstils*, Prestel-Verlag, München, 1988, S. 67.
4. Ulrich Thieme u. Felix Becker (Hrsg.), *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler von der Antike bis zur Gegenwart*, Bd. 16, Leipzig, 1992, S. 150-1.

ル・ヘルタリッヒ (Johann Caspar Herterich, 1843-1905) の下で、翌年までマイスター・シューラーとして絵画を学んでいる⁵。ヘルタリッヒは王立造形美術アカデミーでは Naturklasse を担当して絵画を教え、ゼツェッション運動にも関心があった。ハウシュタインの同期には、画家のマックス・スレヴォーらがいた。

ハウシュタインは翌1899年から『ユーゲント』誌等の装丁を手掛けた (図1)。その後シュトゥットガルトで40年にわたって金属工場の教授として後進の育成に従事することになる。彼が最初に認められたのは、グラフィックの分野においてであった。1901年に刊行された出版者ゲオルク・ヒルス (Georg Hirth, 1841-1916) の理論書『芸術への道』 (*Wege zur Kunst*) や、ライプツィヒの出版社ディーダーリッヒのために、装丁や見返しの図案を制作した他、ルドルフ・ロホガ (Rudolf Rochga, 1875-1957) と装飾図案集『平面装飾における形態と色彩』 (*Form und Farbe in Flächenschmuck*, 1901) を出版した⁶。otto・グラウトフ (Otto Grautoff) は著書『ドイツにおける近代装丁芸術の発展』 (*Entwicklung der modernen Buchkunst in Deutschland*, 1901) の中で、早くもハウシュタインを「様式化された植物の装飾」を好む「ユーゲントシュティルの最も重要な代表者」のひとりに挙げている⁷。このようなグラフィック分野における活躍と評価により、ハウシュタインは1900年頃マグデブルク美術工芸学校から書籍に関わるグラフィックの教員の職の打診を受けたが、応じていない⁸。

グラフィックの分野で認められる一方、1899年ハウシュタインは手工芸連合工場の共同制作者となった。ハイデ・マリー・レーダーは、ハウシュタインが6歳年上の、同じくドレスデンの美術工芸学校の出身で、後に手工芸連合工場の図案家となるブルーノ・パウルと交友があり、それによりミュンヘンの芸術家たちと知り合うことができたのではないかと推察している⁹。またシュレーダーは、ハウシュタインの手工芸連合工房との関わりを、「美術や美術手工業を歴史的様式の模倣から解き、変化した社会形態のためにひとつの新しい表現形態を求めるといふこの共通した仕事の気風、並びに同志たちとの緊密なコンタクトはハウシュタインのその後の人生を導いた」と見ている¹⁰。

手工芸連合工房との仕事の中で彼の才能が目されたのは、金属工芸の分野においてであった¹¹。手工芸連合工房に関わった図案家の中には、絵画を学んだ後、美術工芸、さらには建築の分野に活躍の場を広げていく者が多かったが、ハウシュタインが最初に美術工芸を学び、美術工芸の基礎的な技術と知識を身に付けていたことは、彼が若くして期待された要因であったと考えられる。

3. ダルムシュタット時代：1903～05年

ハウシュタインは1903年にヘッセン大公エルンスト・ルートヴィッヒによりダルムシュ

5 Hiesinger, ebd.

6 Ebd. Thieme-Becker, S. 151.

7 Hiesinger, ebd.

8 Ebd.

9 Ebd.

10 Schröder, S. 4.

11 Ebd.

タット芸術家コロニーに招聘され、ミュンヘンからダルムシュタットに移ることになった。ダルムシュタット芸術家コロニーでは、1898年から1914年にかけて4期に分けてアーティスト・イン・レジデンスが行われ、建築や彫刻、インテリア、グラフィック、金属、陶器、ガラスなどの工芸など様々な分野の新進芸術家たちが招聘されて、ドイツ・ユーゲントシュティルの一大中心地となっていた。

1905年までのダルムシュタット芸術家コロニー滞在中、ハウシュタインは1904年のダルムシュタット芸術家コロニー展に金属工芸や陶器を出展した。ハウシュタインが図案を制作し、リューデンシャイトのゲルハルディ&Co.により鋳造された錫製の作品がいくつか確認される。種子や葉などを連想させる形態の繰り返しによる装飾と角ばった取っ手の形が特徴的な《錫製コーヒー・紅茶セット》(図2)、《錫製ポット、カップ・セット》(図3)において、ハウシュタインはユーゲントシュティルによる作品制作を試み、緊張感のある作品を生み出した。一方、《錫製コーヒー・ティー・セット》は、卵型の容器に2~3連の紡錘状の装飾を施し、楕円形の取っ手を付けた、全体に丸みを帯びた意匠になっている¹²。このような意匠になった理由は、制作手法の違いだけでなく、その使用目的が関係していると考えられる。コーヒー・ポットの下部には「1905年夏学期シラー栄誉賞-王立工科大学ベルリン学生委員会」の文字が刻まれている¹³。ドレスデンのA. ゲオルク・ベシュマンにより制作された三つ又の《真鍮のろうそく立て》(図4)などの照明器具ではさらに装飾の排除が進んでいるが、ろうそくを立てる部分やそれを支える枝の部分にエレガントな曲線が残っている。また、ハウシュタインは1904年の芸術家コロニー展のために銀メダル(図5)を作成した。この円形のメダルには、マチルデの丘にヘッセン大公エルンスト・ルートヴィッヒのEとLのモノグラムを頂く、ダルムシュタット芸術家コロニーの状況を象徴するような意匠が施されている¹⁴。

金属によりさまざまな実用品を制作する傍ら、ハウシュタインは陶芸家ヤコブ・ユリウス・シャルフォーゲル(Jakob Julius Scharvogel, 1854-1938)の製陶所において陶器制作にも携わっている。例えば、ハウシュタインの図案により、1903年にミュンヘンのシャルフォーゲルの製陶所で制作されたタイルは、鉄のフレームと真鍮のパネルを組み合わせた《ラジエーター・パネル》(図6)に使用され、エルンスト・ルートヴィヒ・ハウスに展示された。その他の壁や家具用の装飾タイルや器なども、1904年の芸術家コロニー展において展示された¹⁵。

シャルフォーゲルは、ハウシュタインと入れ替わるようにして、1906年から1914年までダルムシュタット芸術家コロニーに招聘された。その間の仕事として、マチルデの丘研究所編『ヤコブ・ユリウス・シャルフォーゲル—ユーゲントシュティルの陶芸家』(1995年)に王立陶器マニュファクチュア、ダルムシュタット『シャルフォーゲル=タイル』カタログ(1910/11年頃)が紹介されている¹⁶。101番までの見本のうち、カール・シュトッフエ

12 Bröhan-Museum, *Metallkunst der Moderne*, Leipzig, 2001, S. 173.

13 Ebd.

14 Renate Ulmar, *Jugendstil in Darmstadt*, Eduard Roether Verlag, Darmstadt, 1997, S.141.

15 Institut Mathildenhöhe, Darmstadt (Hrsg.), *Jakob Julius Scharvogel. Keramiker des Jugendstils*, Arnoldsche, Stuttgart, 1995, S. 93.

16 Ebd., S. 128-36.

ルの図案による52番と53番以外は、ほとんどが1903年頃のハウシュタインの図案によるタイルである。よく見ると、上述の《ラジエーター・パネル》に天地逆の83番と84番が使われている¹⁷。このカタログの解説文にあるように、このシャルフォーゲル＝タイルは、1904年のセント・ルイス万国博覧会で大賞を受賞し¹⁸、1910/11年頃になってカタログ販売された。1900年頃にあったマイセンのマニュファクチュアからの芸術監督就任の打診は、こうしたハウシュタインの陶器政策の側面が評価されてのことであろう²⁰。1902年頃に始まったシャルフォーゲルとの交友と、ハウシュタインの陶器制作との関わりは後年まで続いた¹⁹。

4. シュトゥットガルト時代前期：1905～13年

ハウシュタインは、1905年にはシュトゥットガルト教育実験工房に金属工房長として招聘され、1907年には教授となった。シュトゥットガルトの教育実験工房 (Lehr- und Versuchswerkstätte der Königlichen Württembergischen Kunstgewerbeschule zu Stuttgart) は、1901年ヴュルテンベルク王立美術工芸学校に併設された美術工芸の教育施設である。パウハウス創設以前に工房教育が導入された、近代における美術工芸の教育施設のひとつとして注目される²¹。

ヴュルテンベルク国王ヴィルヘルム2世 (Wilhelm II. Von Württemberg, 1848-1921) は、ヘッセン大公エルンスト・ルートヴィヒによるダルムシュタット芸術家コロニーのアーティスト・イン・レジデンス (1898-1914) をひとつのモデルとして、芸術家支援を通じた地域産業の活性化を目指した。その際、ヴィルヘルム2世は当時カールスルーエから招聘されて間もないシュトゥットガルト美術工芸学校教授レオポルド・フォン・カルクロイト伯 (Graf Leopold von Kalckreuth, 1855-1928) とカルロス・グレーテ教授 (Carlos Grethe, 1864-1913) に助言を得た²²。

シュトゥットガルト古文書館には、カルクロイト伯とグレーテ教授がヴィルヘルム2世に提出したと考えられる文書が収蔵されている。1900年11月ベルンハルト・パンコック (Bernhard Pankok, 1872 -1943) との面会後、1901年夏以前にヴィルヘルム2世に提出されたミュンヘンの手工芸連合工房のシュトゥットガルト移転計画案である。この計画は頓挫することになるが、この計画がベースとなってヴュルテンベルク王立美術工芸学校にシュトゥットガルト教育実験工房が設置されることになった。

この文書には最初にコンラート・ランゲ教授の文章があり、その後グレーテ教授とカルクロイト伯の文章が続く。ランゲ教授は手工芸連合工房を美術工芸の教育実験工房の先駆

17 Ebd., S. 132.

18 Ebd., S. 130.

19 Ebd., S. 93.

20 Hiesinger, ebd.

21 Ekkehard Mai, *Die deutschen Kunstakademien im 19. Jahrhundert: Künstlerausbildung zwischen Tradition und Avangarde*, Böhlau Verlag, Köln, 2010, S. 344-7.を参照のこと。

22 グレーテについては以下のカタログに詳しい。Ingrun Stocke, *Stiftung Schlösschen im Hofgarten* (Hrsg.), *Vom Realismus zum Impressionismus. Werke von Carlos Grethe (864-1913)*, Verlag und Datenbank für Geisteswissenschaften, Weimar, 2009.

的な例と見做して大きな関心を寄せており、グレーテ教授とカルクロイト伯はランゲ教授よりも手工芸連合同工房を熟知していることを示しつつ、同工房の工房組織について詳説している。グレーテ教授らの文書の13ページ目には、現在手工芸連合同工房に参加している芸術家として、シュトゥットガルト教育実験工房の初代の工房長となったクリューガー、2代目の工房長となったパンコックの他にハウシュタインの名前が挙がっている²³。ハウシュタインがシュトゥットガルト教育実験工房に招聘されることになるのは1905年のことであるが、教育実験工房の設置以前からハウシュタインが手工芸連合同工房の重要な図案家の一人と認識されていたことは注目される。

初代教育実験工房長フランツ・アウグスト・オットー・クリューガー退任後、1903年10月1日にはパンコックが教育実験工房の施設長となっていることから、ハウシュタインの教育実験工房教員への選考はパンコックの意向が少なからず反映されていると考えられる²⁴。しかし、1902年にはヴェルテンベルクの美術協会（Kunstverein）の会員となり、同協会の展覧会に参加していたことも、ハウシュタインが教育実験工房教員に選考される際、有利に働いたことは想像に難くない²⁵。

補助教員として金属部門の監督を務めていた画家ベルナーの後、1905年4月1日にハウシュタインは金属専攻の主任教員としてシュトゥットガルト教育実験工房に招聘され、2年後には教授に任命された²⁶。金属工房の教育マイスターはブルの後、1906年7月1日金属細工師のアルトゥール・ベルガーに引き継がれた²⁷。

ダルムシュタット芸術家コロニーをひとつのモデルとして、芸術家支援を通じた地域産業の活性化を目指していたヴィルヘルム2世にとって、ダルムシュタット芸術家コロニーから芸術家を招聘できたことは、シュトゥットガルト教育実験工房にとって喜ばしいことであつたらしく、1905/06年度の年次報告書には、ハウシュタインを「獲得」したと記されている²⁸。

1904～1906年当時のシュトゥットガルト教育実験工房には、4つの工房、すなわち家具工房、金属工房、陶器工房、平面芸術及びその他の工房の4つの専攻が開設され、全工房の共通科目として、ヌード・デッサン（週8時間）、投影図法等（週4時間）、美術工芸の材料についての講演（週2時間）、自然科学演習（週3時間）、美術装丁（週4時間）、価格計算、簿記等（週4時間）、講演と研修旅行（週6時間）、図書室（週1時間）が設けられていた²⁹。

23 HStAS E14 1659, Eine Akte von Professor Lange, Professor Groethe u. Graf Kalckreuth, *Akademie der bildenden Künste 1900-1918*, Hauptstaatsarchiv Stuttgart, ca. 1900-1, S. 13.

24 パンコックとの家族ぐるみの交友は1900年以前から始まり、生涯続いたという。 Gudrun Wessing, *Bernhard Pankok als Porträtmaler*, Coppenrath Verlag, Münster, 1988, S. 35.

25 Schröder, S. 4.

26 Ebd.

27 ベルガーは補助教員となった。 *Jahres-Bericht der K. Kunstgewerbeschule und der Kunstgewerblichen Lehr- und Versuchswerkstätte zu Stuttgart für die Schuljahre 1904/05 u. 1905/06*, Stuttgart, 1907, S. 47.

28 Ebd., S. 46.

29 Ebd., S. 65. 教育実験工房の教育の基本方針と、金属工房以外の教育科目については、拙論「シュトゥットガルト教育実験工房のカリキュラムについて」『美術教育学研究』（48号、2016年、337-344頁）を参照のこと。

ハウシュタインが担当した授業は、家具工房と金属工房の共通科目であった、「自然を対象としたデッサンと描画」（週4時間）と、陶器工房以外の工房の共通科目であった「彫塑」（各週4時間、金属工房ではハウシュタインとハービツヒが分担）、そして金属工房の専門科目である、「専門製図及び図案」（週12時間）と「工房」（週17時間、ハウシュタインと教育マイスターが担当）であった³⁰。シュトゥットガルト教育実験工房の金属工房では、製図と図案の制作とともに、工房での作品制作に多くの時間を割いていたことが分かる。

シュトゥットガルト教育実験工房の、ハウシュタインの金属工房の生徒たちの作品については、1909年の『金細工芸術ジャーナル』43号に Chr. オットマーやアルフレート・レックス、Fr. シュレー、ヨーゼフ・アーノルト、ゴットリーブ・エップレの彫金によるブローチなどのジュエリーが紹介され、「パウル・ハウシュタイン教授の指導の下に生徒たちによって仕上げられたこれらの作品は、堅実な趣味の教育に加え、素材に合った技術的な処理を示している」と評価されている³¹。また、ヨーゼフ・ヴラバクの《銀杯》はマイスター試験の際に制作した作品であることが明記されている³²。

翌1910年『装飾芸術』誌5月号には、ハウシュタインの金属工房の生徒たちの作品、鍛金による蓋物や皿、彫金によるジュエリーなど19点が掲載された³³。図版の一部は1909年の『金細工芸術ジャーナル』43号と一部重複している。図案にはユージェントシュティルなどの特定の傾向は見られないが、確かな技術力を示している。ヴュルテンベルク州博物館所蔵のハウシュタイン作《象牙つまみ付き銀製容器》（1910年頃）と比べると丁寧な仕上がりであることから、これらの掲載作品は卒業制作にあたる作品かもしれない。

1905年以降、ハウシュタインはシュトゥットガルトを拠点に活動したが、1907～1909年にはニュルンベルクのバイエルン産業博物館附属美術工芸マイスターコース（*Kunstgewerblicher Meisterkurs*）においても監督を務めている。ハウシュタイン以前には、ペーター・ベーレンスが第1期と第2期、リヒャルト・リーマーシュミートが第3期～第5期の美術工芸マイスターコース長を務めていた。1年のブランクの後、第6期美術工芸マイスターコースは1907年9月2日から28日まで³⁴、第7期美術工芸マイスターコースは1908年3月9日から4月4日まで³⁵、第8期美術工芸マイスターコースは1909年7月19日から8月14日まで実施された³⁶。いずれも4週間の集中コースである。それぞれのコースに12

30 Ebd.

31 "Zu unseren Abbildungen", *Journal der Goldschmiedekunst*, 30. Jg., Nr. 43, 1909, S. 384.

32 Ebd., S. 386.

33 レックスの鍛金による蓋物と果物皿、Jos.アーノルトの鍛金による蓋物、彫金によるペンダントヘッド、銀製ブローチ、Fr.シュレーの鍛金による真鍮製郵便ポスト、ヨーゼフ・ヴラバクの金製ペンダントヘッドなどが紹介されている。Erich Willrich, "Aus dem Württembergischen Kunstleben", *Dekorative Kunst*, XIII. 8. Mai 1910, S. 381-392. これらの作品の一部は *Journal der Goldschmiedekunst*, 34. Jg., Nr. 43, 1913, S. 711-713にも収録されている。

34 Bayerisches Gewerbemuseum Nürnberg, *Bericht über das Jahr 1907*, Nürnberg, um 1908, S. 36.

35 Bayerisches Gewerbemuseum Nürnberg, *Bericht über das Jahr 1908*, Nürnberg, um 1909, S. 34.

36 Bayerische Landesgewerbeanstalt Nürnberg, *Bericht über das Jahr 1909*, Nürnberg, um 1910, S. 76.

名³⁷、13名³⁸、10名の受講者がいた³⁹。

ハウシュタインのバイエルン産業博物館附属美術工芸マイスターコースでの教育内容の詳細は明らかではないが、バイエルン産業博物館の年次報告書には、1908年ニュルンベルクの土地住宅所有者協会が第7期美術工芸マイスターコースに400マルクを出資し、それにより博物館がニュルンベルクの彫刻家 Joh. シュテットナーによって製作された戸棚を買い上げたこと、この作品は彼が第6期美術工芸マイスターコースで図案制作したものであること、また同年11月からクリスマスまでの間に、それまでの美術工芸マイスターコース参加者たちが「クリスマス展」を実施し、成功裡に終わったことが報告されている⁴⁰。

この間のハウシュタインの作品は、《銀製紅茶セット》(図7)の金属工芸の作品など、ヴァーリヒの『住宅と家具』(1908年)に数多く収録されている。ハウシュタインは若くしてグラフィックや陶器、金属工芸などの領域で才能を発揮し、金属工房で教育を行ったが、1905年にはルートヴィヒスブルクのバルス邸、1912年にはシュトゥットガルトのローゼンフェルト邸など、家具をはじめとする室内装飾の図案制作も手掛けた⁴¹。その幅広い活動の一端が、ヴァーリヒの『住宅と家具』にも紹介されている。

5. シュトゥットガルト時代後期：1913～44年

1913年にシュトゥットガルト教育実験工房が美術工芸学校に吸収合併された後、ハウシュタインは亡くなる1944年までシュトゥットガルトの王立美術工芸学校においても金属工芸の専門教育に携わった。『王立美術工芸学校』(1913年)「I. 施設の組織」によれば、ハウシュタインは金属技術(Metalltechnik)の教授で、金属技術の教育マイスターは引き続きベルガーが務め、材料管理者を兼務した⁴²。

金属技術専攻の必修科目は、写生、人物デッサン、専門製図、人物彫塑、工房、クロッキー、自然形態学、材料学、装飾及び建築様式形態学、価格計算、簿記、法学であった⁴³。『王立美術工芸学校』(1913年)には授業担当者や授業内容の詳細は示されていない。

1913年から1937年までシュトゥットガルトの王立美術工芸学校校長を務め、家具工房を率いたパンコックは、家具を始めとする室内装飾を手掛ける傍ら、数多くの肖像画を描いた。パンコックは1916年にハウシュタインを描いている(図8)。コート姿のまま、アトリエの肘掛け椅子に深く腰掛けたその肖像画は、若いながらも落ち着いたハウシュタイン

37 第6期美術工芸マイスターコースの参加者の職業の内訳は、装飾画家2名、彫金師1名、美術家具職人2名、彫刻家2名、美術鋳物師2名、象牙彫師1名、木彫家1名、彫版師1名であった。Bayerisches Gewerbemuseum, *Bericht über das Jahr 1907*, ebd.

38 第7期美術工芸マイスターコースの参加者のうち、彫刻家が3名、装飾画家が2名、美術家具職人が4名、象牙彫師、木彫家、美術鋳物師、木工ろくろ職人が各1名であった。Bayerisches Gewerbemuseum, *Bericht über das Jahr 1908*, ebd.

39 第8期美術工芸マイスターコースには、建築家、彫刻家、装飾画家、象牙彫師、ガラス絵師、木彫家、美術木工ろくろ師、家具図案家が各1名、美術彫金家が2名参加した。Bayerisches Gewerbemuseum, *Bericht über das Jahr 1909*, ebd.

40 Bayerisches Gewerbemuseum, *Bericht über das Jahr 1908*, ebd.

41 Thieme-Becker, S. 150.

42 *Königliche Kunstgewerbeschule Stuttgart*, Stuttgart, 1913, S. 8-9.

43 Ebd., S. 11.

の人となりをよく伝えている。

シュトゥットガルトの王立美術工芸学校で制作されたハウシュタインの作品としては、ベルリンのブローハン美術館の所蔵作品の《真鍮製文具セット》(1930年頃、図9)がある⁴⁴。インク壺、消し具、手紙立て、メモ用紙入れ、ペーパーナイフで構成されたセットには、黒とグレーのエナメルで幾何学的なデザインが施されている。このようなアール・デコ調の装飾を、ハウシュタインも1920年代後半頃から試みていたと見られる。

パンコック退任後、ハウシュタインは1938年から1942年までシュトゥットガルト美術工芸学校の校長も務めている。その間、1940年にはカンツライ通りの国立展示場でハウシュタインの60歳を祝う展覧会が開催された。その広告あるいは報告(『シュヴェービッシュの美術マップ』)の図版のひとつから、ハウシュタインが生徒を指導する様子を垣間見ることができ(図10)⁴⁵。また、その他の図版によれば、同展覧会ではろうそく立てやランプシェードなどの金属製品の他、素材は分からないが鉢や花瓶、頭像、作品写真など多岐にわたる作品が展示された。

40年にわたるシュトゥットガルトでの金属工芸教育の中で、ハウシュタインは多くの優秀な生徒たちを、ハイムプロンのP.ブルックマンやガイスリンゲンのヴェルテンベルク金属製品工場(WMF)などに送り出した。また教育の傍ら、ハウシュタインは様々な企業に製品の原型を提供して産学連携を推し進め、シュトゥットガルトの芸術的な金属製品の生産に寄与した。

6. おわりに

以上、シュトゥットガルト教育実験工房の金属工房において、近代シュトゥットガルト金属工芸の礎を築いたハウシュタインの制作・教育活動についてまとめてきた。近代ドイツ美術工芸運動の主要な組織にことごとく関与した華々しい経歴に比べ、彼が関与した組織の報告書や美術工芸のカatalogue、雑誌などにもハウシュタインや彼の作品への言及は少なく、ハウシュタインの美術理念や教育内容については依然として分からないことが多い。今後、機会があれば、ハウシュタインの現存する作品等についてさらに調査を行いたい。

44 消し具以外には“E mit Löwen-Aquamanile”と刻印されている。Eは、Erhard & Söhne社のこと。Bröhan-Museum, *Metallkunst der Moderne*, Leipzig, 2001, S. 146.

45 “Jubiläumsausstellung Professor Haustein”, *Schwäbische Kunstmappe*, um 1940.

図版：

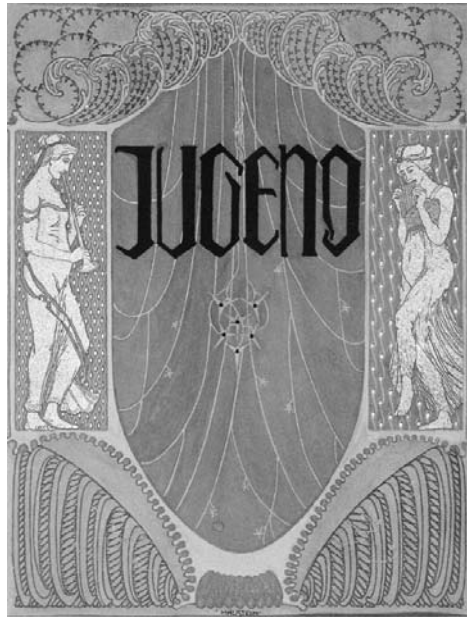


図1 パウル・ハウシュタイン『『ユーゲント』表紙図案』1904年頃，所蔵：芸術家コロニー美術館，ダルムシュタット



図2 図案：パウル・ハウシュタイン，制作：ゲルハルディ&Co.《錫製コーヒー・紅茶セット》1904年頃

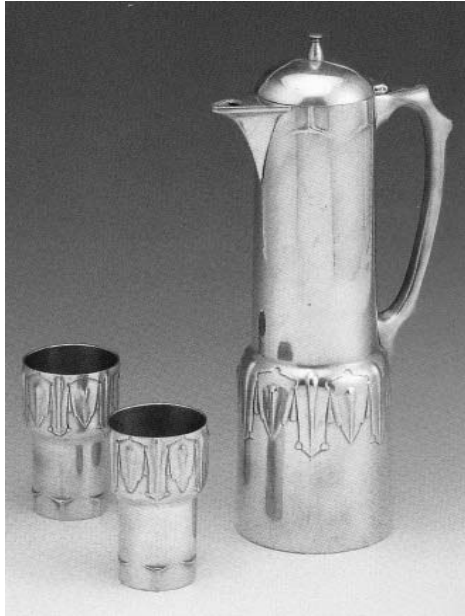


図3 図案：パウル・ハウシュタイン，制作：ゲルハルディ&Co.《錫製ポット，カップ・セット》
1904年頃

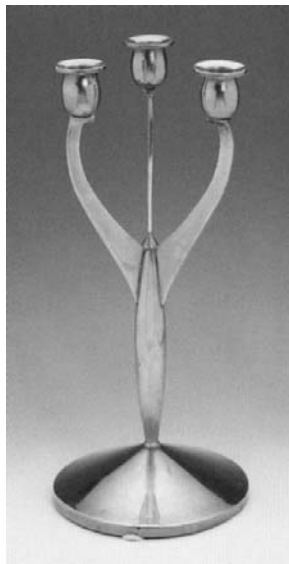


図4 パウル・ハウシュタイン《真鍮ろうそく立て》1904年頃

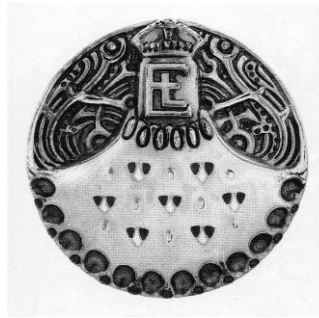


図5 パウル・ハウシュタイン《1904年芸術家コロニー展銀メダル》1904年頃

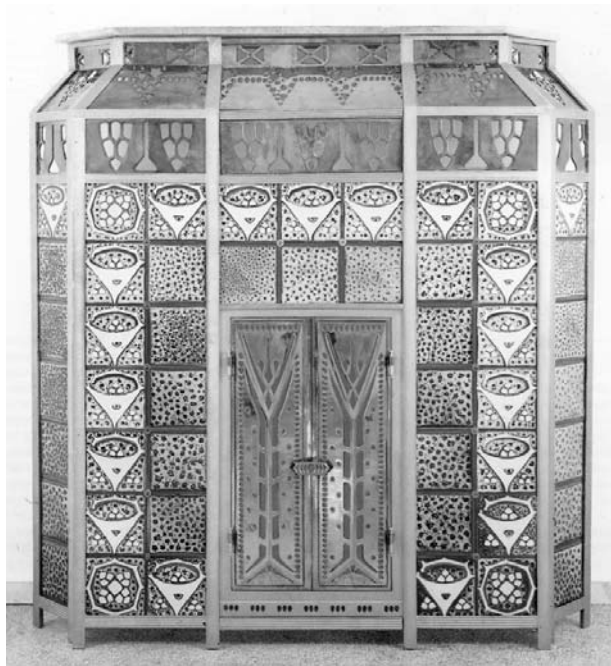


図6 図案：パウル・ハウシュタイン, タイル制作：シャルフォーゲル製陶所《ラジエター・パネル》
1903/04年



図7 パウル・ハウシュタイン《銀製紅茶セット》1908年頃



図8 ベルンハルト・パンコック《パウル・ハウシュタイン肖像》1916年

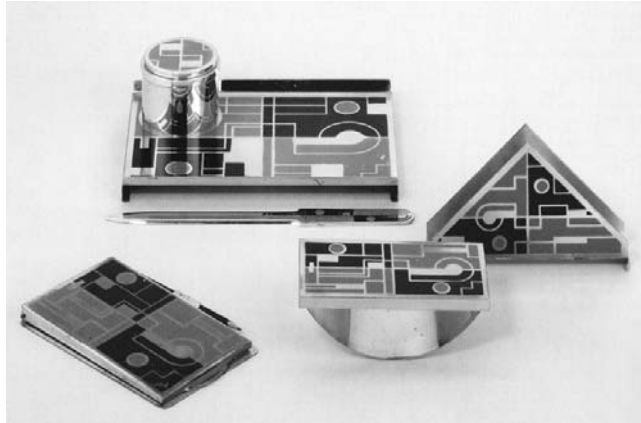


図9 図案：パウル・ハウシュタイン，制作：エルハルト&ゼーネ社及びレーヴェン＝アクアマニレ
《真鍮製文具セット》1930年頃，所蔵：プレーハン美術館，ベルリン



図10 《指導をするパウル・ハウシュタイン》

図版典拠：

図1, 5, 6 Renate Ulmar, *Jugendstil in Darmstadt*, Eduard Roether Verlag, Darmstadt, 1997, S. 141-3.

図2, 3, 4 Institut Mathildenhöhe Darmstadt, *Museum Künstlerkolonie Darmstadt*, Darmstadt, 1990, S. 89.

図7 H. Warlich, *Wohnung und Hausrat*, München, S. 95.

図8 Gudrun Wessing, *Bernhard Pankok als Porträtmaler*, Coppenrath Verlag, Münster, 1988, S. 419.

図9 Bröhan-Museum, *Metallkunst der Moderne*, Leipzig, 2001, S. 146.

図10 “Jubiläumsausstellung Professor Haustein”, *Schwäbische Kunstmappe*, um 1940.

謝辞：

Einen besonderen Dank möchte ich Frau Dr. Maaïke van Rijn, Frau Dr. Katharina Küster-Heise, Württembergischem Landesmuseum Stuttgart, Frau Dr. Angela Zieger, Archiv der Akademie, Frau Mayumi Pfundtner, Bibliothek der Staatlichen Akademie der Bildenden Künste Stuttgart, Württembergischer Landesbibliothek Stuttgart, und Hauptstaatsarchiv Stuttgart aussprechen.